饒舌

芥川龍之介

始皇帝がどう思つたか、本を皆焼いてしまつたので、神田の古本屋が職を失つたと新聞に出てゐるから、ひどい事をしたもんだと思つて、その本の焼けあとを見に丸ノ内へ行かうとすると、銀座尾張町の四つ角で、交番の前に人が山のやうにたかつてゐる。そこで後から背のびをして覗いて見ると、支那人の婆さんが一人巡査の前でおいおい云ひながら泣いてゐた。尤も支那人と云つても、今の支那人ではない。平福百穂さんの予譲の画からぬけ出したやうな、古雅な服装をした婆さんである。巡査はいろいろ説諭をしてゐるが、婆さんの耳には少しもそれがはいらな

いらしい。何しろあんまり婆さんの泣き方が猛烈だから、どうしたんだらうと思つて見てゐると、側にゐたどこかのメツセンヂア・ボイが二人(ふたり)でこんな事を話してゐる。

「あれは丸善(まるぜん)の金(きん)どんのお母(つか)さんだよ。」

「どうして又金どんのお母さんがあんなに泣いてゐるんだらう。」

「なにね、始皇帝(しくわうてい)が今日(けふ)東京中の学者をみんな日比谷(ひびや)公園の池へ抛(はふ)りこんで、生埋(いきう)めにしちまつたらう。それで金どんもやつぱり生埋めにされちまつたもんだから、それであんなにお母さんが泣いてゐるのさ。」

「だつて金どんは学者でも何(なん)でもないぢやないか。」

「学者ぢやないけれど、金どんはあんまり生物識(なまものしり)を振まはすから、丸善(まるぜん)ぢや学者つて綽名(あだな)がついてゐるんだよ。だから警察でも大学教授や何かの同類だと思つて、生埋めにしてしまつたのさ。」

するとその隣の、小倉(こくら)の袴をはいた書生が、

「怪(け)しからんな。名の為に実(じつ)を顧みないに至つては閥族(ばつぞく)の横暴も極(きはま)れりだ。」と憤慨(ふんがい)した。

自分もそれは乱暴だと思つたから、

「実に怪(け)しからんですな。」と書生の憤慨に賛成の意を表(へう)した。書生は自分の賛成を得て大(おほい)に知己(ちき)を得た

やうな気がしたのだらう。彼は自分の方をふりむくと、滔々としてこんな事を辯じ出した。

「万事この調子だから驚くです。かう云ふ事には最も理解がある可き文壇でさへ、イズムで人間を律しようとするんですからな。一度新技巧派と云ふ名が出来ると、その名をどこまでも人に押しかぶせて、それで胡麻をする時は胡麻をするし、退治する時は退治しようとするんですからな。我々青年はまづこの弊風を打破しなければいかんです。僕はこの間博浪沙で始皇帝の車に鉄椎を落させました。不幸にしてそれは失敗しましたが、まだ壮心が衰へた訳ではありません。」

かう云つて書生は、群集を麾きながら、
「諸君、憲政の擁護の為にあの交番を破壊しようではありませんか。」と絶叫した。
それに応じてどこからか石が一つ斜に空を切りながら、かちやりと音を立てて交番の窓硝子へ穴をあけた。その音で気がつくと、自分は依然としてカツフエ・パウリスタのテエブルに坐つてゐる。かちやりと云つたのは、珈琲の匙が手から皿の上へ落ちた音らしい。自分は黒いモオニングを着た容貌魁梧な紳士と向ひ合つた儘、眼を明いて夢を見てゐたのである。紳士は自分が放心から覚めたのを見ると、

「新年の新聞に何か書いてくれませんか。」と云つた。

「この頃は何も書きたくないんだから駄目(だめ)です。」

「そんな事を云はずに何か書いてくれ給へ。何(なん)でもいいのです。たとへば「新技巧派について」と云ふやうなものでも。」

自分はぎよつとした。事によるとこの紳士は自分の夢を知つてゐるのかも知れない。

「それでなければ「旧技巧と新技巧と」はどうです。」

「駄目(だめ)です。第一新技巧などと云ふ事は考へた事もありやしません。」自分はぶつけるやうに云つた。

「しかし何か書けるでせう。」

「書けば、あなたに頼まれて書くと云ふ事を書くだけです。」
「それでもいいから、書いてくれ給へ。」
紳士はポケツトを探(さぐ)つて、原稿用紙と万年筆(まんねんひつ)とを出した。外では歳暮(せいぼ)大売出しの楽隊の音がする。隣のテエブルでは誰かがケレンスキイを論じ出した。珈琲(コオヒイ)の匂(にほひ)、ボイの註文を通す声、夫(それ)からクリスマス樹(トリイ)――さう云ふ賑かな周囲の中に自分は苦(にが)い顔をして、いやいやその原稿用紙と万年筆とを受取つた。それで書いたのが、この何枚かの愚にもつかない饒舌(ぜうぜつ)である。だから孟浪杜撰(まうらうづざん)の責(せめ)は寧(むし)ろ今自分の前に坐つてゐる、容

貌魁梧(くわいご)な紳士にあつて、これを書いた自分にはない。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。